

～ 音楽鑑賞文ノススメ ～



世の中には多くの感想文コンクールがありますが、「音楽」が対象となるのは稀だと思います。そのため、取り組むことに少し戸惑われるかもしれません。音楽は目に見えず、触れることができないため、その活動や体験を言葉に表すのは難しいです。だからこそとても大切なことだと考えます。聴く楽しみや感動、発見。曲をかたち作っている声や楽器のこと。それはどんな風でどう感じたのか…音で作られた景色を言葉にしてみませんか。

第8回 胡堂・あらえびす大賞 読書と音楽の感想文コンクール

募集期間 令和4年8月1日(月)～10月31日(月)

【応募資格等】

- ・小学生以上の方であれば、どなたでもご応募いただけます。
- ・児童生徒は、在籍校を通じての応募をお願いいたします。各学校の応募点数に上限はありません。1人1通であれば、何編でも応募いただけます。

【部門と対象となる音楽、字数等について】

ア クラシック音楽・伝統音楽部門 クラシック・伝統曲であれば自由

イ ポピュラー音楽部門 ポピュラーミュージック等自由

※ア、イそれぞれ以下の3部門

- (1) 小学校の部 1.2年生は800字以内 3.4.5.6年生は1,200字以内
- (2) 中学校の部 中学校以上は2,000字以内
- (3) 高等学校・一般の部

【用紙の使い方】

- ✎ 原稿用紙に縦書きで自筆
- ✎ 用紙の大きさや字詰めは自由
- ✎ 句読点はそれぞれ1字に数える
- ✎ 改行のための空白は字数として数える

3行目
2行目
1行目
↓
学校題
校名
学年
氏名

右側欄外
曲名と作詞作曲者名

※ 一般の応募者に限り、パソコン原稿(ワード)、メールでも応募が出来ます。詳細については、HPをご確認ください。

主催：紫波町教育委員会 共催：NPO法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会 申込・問合せ先：紫波町中央公民館
〒028-3305 岩手県紫波郡紫波町日詰字下丸森 24-2 ☎019-672-3372 ✉ph_center@town.shiwa.iwate.jp

心の中の鏡

紫波第一中学校 三年 中島 実莉

この曲の始まりは、静かで少し高めめの音が多く、まるで澄んだ秋の夜空に浮かぶ月を思い浮かべた。音数は少ないが、その旋律は滑らかに流れていき、夜の湖に月が映り、その月の光が暗い湖畔を明るく照らしているようだ。強弱の変化も少なく、一見曲が淡々と過ぎていくように感じるが、そのことによって落ち着いた雰囲気が出され、優しく微笑みかけられているように感じた。しかし、旋律や音色が荒々しく、次第に強弱も激しくなり、声に出すことができず、誰にも聞こえない孤独な叫びに私には聞こえてきた。まるで悲しみや切なさなどの、人間の負の部分の感情を反映し、表現しているかのようだ。それは作曲者が抱えている心の不安や、焦りをも一つの曲に表現し、伝えようとしていると思えた。誰にもある自分の中の闇の部分が表示されているような気がした。

私は小学生の頃、辛い時も素直に辛いと人にいうことができず、その悩みを自分の心の中にしまい込んでいた。伝えたいことがあっても自分の気持ちをどう表現してよいかかわからず、結局何も伝えられなかった過去の自分を思い出した。こんな私の気持ちを代弁してくれているかのようで、とても慰められた。もしかしたら、作曲者も自分の気持ちや言えず、自分の感情に無理やり蓋をしていったのではないか。そして自分が伝えることができなかつた思いを、この「月の光」に託し、辛い思いをしていくすべての人に、安心感を与えようとしたのではないかと想像した。

私は初めてこの曲を聴いて、月と光の移り変わりや、人がもつ感情を重ね合わされていることに共感した。少ない音、自らの考えを誇張したところがなくさりげない法を用いて作曲されていることが、私の心の中に奥底に響いたのだと思う。

曲名 月の光
作曲 ドビュッシィ

思い出の校歌

星山小学校 六年 工藤 縁

「朝日の光あびながら」
星山小学校の校歌は、明るくて歌っていると元気が出ます。そして、いろいろな情景が浮かびます。東の山と山の間から、太陽がのぼってくる様子や、夕日に照らされた城山公園の様子などです。私は、そんな星山小学校の校歌の中にある風景を思い浮かべるのが大好きです。

私が星山小学校の校歌の中で一番好きな歌詞は、「今日の幸いかみしめて」ところです。なぜかという、今、私たちがこうしていられることが当たり前ではないときもあるからです。いつものように笑って過ごして今日一日を終えるという当たり前が一番の幸せだと感じます。

この曲は、昭和四十二年に制定されたそうです。遠山緑さんという方が作詞をし、藤井逸郎さんが補作したそうです。この星山の風景のことを思いながら校歌を考えただろうなと思いました。私の学校の校歌には「朝日」「夕日」「こがねの波」があります。「こがねの波」の歌詞からは、真昼の太陽の光を浴びて反射するきれいな川が浮かびます。この三つの「太陽」は、どれも失ってはいけない、光がおとろえてはいけない、大切な未来への希望を表していると思います。校歌を作曲した人は、川村迪雄さんだそうです。「太陽」をイメージして明るい曲にしたのだと思いました。

実は、私の母も星山小学校の卒業生で私と同じ、この校歌を歌っていました。母の思い出は、運動会の際に、こたきで校歌をやってみせたそうです。放課後の練習でも苦労したと聞いて大変だったんだなと思いました。同時に校歌をたいこと、リーダーと、けんばんハーモニカで演奏したら、とってもにぎやかになるだろうなと思いました。

私もこの校歌にたくさん思い出がつまっています。初めての入学式時に不安な気持ちになったこと、山形へ転校する友達と一緒に別れ会で歌った校歌。教育長さんに教えていただいた校歌の録音。「大人になってもずっと残るよ。」と言われ、ドキドキしながら全校のみんなが心をつなげて、一生懸命に歌いました。録音が終わった後、教育長さんが考えたばんそうで校歌を歌い、すみわたった青空に美しい音色がすいこまれていった感じがしたことなど、いろいろな場面でも歌った校歌には、まだまだたくさん思い出があります。

星山小学校は、今年で閉校します。閉校まであと少しですが、この校歌をいつまでも忘れないように歌詞の一つ一つの言葉を大切に歌っていきたくたいです。

曲名 星山小学校校歌
作詞 遠山 緑
作曲 川村 迪雄

音がくとお話

水分小学校 二年 わたなべ あみ

「タン、タタタ、タ、タ、タン、タン、ターン。」
この元気が出るトランペットの音。高くて力づよい音で、たのしくなって、今にもあるきたい気分になってくる。

先生に「くるみわり人形」の紙しばいを読んでもらって、やつぱりと思っ
た。このトランペットは、ぜったいくるみわり人形がみんなをひきつれてね
ずみをやっつけに行くところだ。

つよくてたくさんいるねずみたち、こわいけれど、この力づよいリズムに
のって元氣よく行しんしていたら何だかかてそうな気がする。

そしてその後にながれるバイオリン。きれいな音色でしずかにひいている
かんじが、気もちをおちつかせてくれる。

このバイオリンはたぶんクララ。クララがくるみわり人形をはげましてい
る。少ない数でねずみたちにむかっていく人形たちをやさしくはげましてい
るかんじがする。

クララのおうえんをうけて、ますますはりきって行しんする人形たち。さ
い後にはこの二つのメロディがかさなりあって、とてもすてきな音がくにな
る。

クララとくるみわり人形がいっしょになって、わるいねずみをやっつける。
そのとたんまほうがとけて人形が王子さまに。

わたしはそうぞうすることがすき。家でもぬいぐるみをつかって、自分で
作ったお話をえんじている。

だから、このきよくをきいて音がくとお話がぴったり合うのが、とてもた
のしかった。目の前で見ている紙しばいの中に、音がくの時間にきいたあの
メロディがながれてくる。そしてきよくに合わせてお話がすすんでいく。何
ておもしろいだろう。

わたしも自分で作ったお話の中に、音がくも作って入れてみよう。
たのしいだろうな。

曲名 組曲「くるみわり人形」から こうしんきよく
作曲 チャイコフスキー

こねこのダンスパーティー

佐比内小学校 一年 ただ まゆ

タラッタ、タツ、ピューヨーン、タラッタ、タツ、タララー、なん
て、すてきなおとなんだろう。 おんがくのじかにきいた「おどるこねこ」
のきよくは、バイオリンやピアノ、ラップなど、たくさんのがっきのおとで、
きれいにきこえてきたので、わたしは、うっとりしてしまいました。

わたしのあたまのなかには、もりのはらっぱにあるすこしたかくて、ひろ
いステージがみえてきました。

そこには、たくさんのおうじさまとおひめさまが、てをくんでゆ
っくりとおどっています。

まえにかついで、なくなったトラコやいなくなったラインもおしゃれな
ドレスをきて、たのしそうにまわって、おどっています。

タラッタ、タツ、ピューヨーンの「ピューヨーン」はきいているうちに「ニ
ャーオーン」にきこえてきました。

だんだんきよくのスピードがはやくなつてきて、かわいいことりもそらか
らやってきてピューピューなきました。

ダンスパーティーは、とてもたのしそうでいいなあとおもいました。
わたしもピアノのはっぴょうかいのときにきたうすむらさきいろのドレ
スをきて、おどりたくなりました。

クラスではこのきよくにあわせてはるきくんやあまねちゃん、まどかちゃ
んとてをとったり、まわったりして、みんなにこにこ、きもちよくおどりま
した。

そのうち、いぬがやってきて、大きなこえでワンワンほえたのでこねこた
ちは、こわくなり、ものすこいスピードでおうちにかえってしまいました。

これで、このきよくはおわったけれど、かわいいこねこたちのダンスパー
ティーはわすれたくなくて、おえかきをして、のこしています。

曲名 おどるこねこ
作曲 ルロイ・アンダーソン

初めてきいたタンゴの演奏

上平沢小学校 六年 伊藤 聖華

十一月十五日の一斉参観日にタンゴの演奏会がありました。私は、最初タンゴの意味すらよく分かりませんでした。でも、演奏している方の話を聞いているうちに、タンゴはアルゼンチンで生まれた音楽で、四拍子の踊りの音楽だということを初めて知りました。そして、アルゼンチンのタンゴとヨーロッパのタンゴなど色々な種類のタンゴがあることも知りました。私が一番驚いたのは、バンドネオンという楽器は、ドレミと順番に並んでいるのではなく、両方合わせて七十一のボタンがありそれぞれの音を全部覚えなくてはならないのだそうです。出る音は何と全部で百四十二音、楽器を習いに来た人の多くがあきらめてしまうという話がよく分かりました。

タンゴの演奏が始まると、三つの楽器の音が重なって、とてもダイナミックで迫力のある音が、体育館中に響きわたりました。私は体がふるえました。バンドネオンは、あんなに難しい楽器なのに、簡単そうに正確で、どこかなくかしくなるような音を出していました。バイオリンは美しく、それでいて迫力のある音で胸がドキドキしました。ピアノは、あんなに速く正しい音を弾けるなんてすごいと思いました。私もピアノを習っているのでもよく分かりませんが、こんなに強弱をつけて速く正確に弾けるようになるためには、気の遠くなるようなものすごい練習をし、努力をしたのだと感じました。そう思ってきたと、さらに感動が強くなりました。私が一番気に入った曲は、「タンゴの好きなおじょうさん」という曲でした。ピアノとバイオリンの音が重なってとても良いハーモニーでしたし、バンドネオンのやさしい音も合わせたり、思わず口ずさみたくなるような音色で心に残りました。「情熱大陸」の曲もとても良かったです。きいたことがある曲でメロディーを知っていたこともありますが、ききやすいし、なによりバイオリンの音がとてもきれいで、まるで本物の葉加瀬太郎さんが目の前で演奏しているように思えました。「黒ネコのタンゴ」は、どこかで聞いた曲だし、テンポが速くとても楽しい気分になりました。きいているうちに私は、黒ネコがダンスをしているのが頭にくかびました。日本でも以前、タンゴが流行したことがあるそうです。三人の生伴奏で「百パーセント勇氣」と「たき火」などを歌ったことも心に残りました。上平沢小学校のみんなと歌う歌と楽器の音が合わせり美しい音楽になりました。私は歌いながら、感動してしまいました。こんな上手なプロの方の伴奏で歌う機会などなかなかないと思いました。だから、私は、この機会を大切にしようと思いをこめて歌いました。

今回、初めてタンゴの生演奏をきいて、すごく感動し、一生の思い出になりました。もっとたくさんの人にタンゴをきいてもらい、良さを知ってほしいと思います。

曲名 組曲「タンゲラ」(日本名(訳)タンゴの好きなお嬢さん)
作曲 マリアーノ・モーレス

「ブラームス交響曲第二番」が好きだ

花巻市立花巻北中学校 二年 藤原 知慈

「ブラームス交響曲第二番」には深い思いがある。それは、私が今所属しているオーケストラで、入団した年の定期演奏会で弾いた思い出だ。私はヴァイオリンを弾いている。先輩に教わり弾けるようになった達成感は今でも覚えている。そして光り輝くステージで私の友人や先輩方と演奏したことは、今でも最大の思い出だ。

ブラームスの曲は、冷たい曲風であるものが多い。なぜなら彼の故郷はドイツの北方で比較的寒い地域であるからである。私はこの言葉を坂本龍一監督から教えて頂いた。しかし、交響曲第二番は、温かく田園的である。私は、この例外的なところが好きである。

そしてもう一つある。それは、三楽章の始めのオーボエのところである。この絶妙な軽やかさと優しさが好ましい。そしてリズムを担当しているチェロのピッチカートが少しの間、待っている私の心を落ちつかせてくれるように好きである。

このあとにあるヴァイオリンの連符は、強弱と速さの組み合わせが難しい。しかし、そのテンポとリズムで弾くからこそおもしろいのだ。フルートとヴァイオリンのかけ合いは、まるで一位の座をかけた徒競走のようだ。

次に好きなのは四楽章だ。一度静かになるかと思つたらいきなり速くなったところが騙しているかのようで好き。そして、速い連符が弾けるようになった時は、とても嬉しく、次の成功への励みになる。

中盤になると、オーボエが怪しさをだすところがあり、そこがまたヒヤッとするとおもしろい。

終盤になると、管楽器がクライマックスの音になるところがまたおもしろい。最後の「ジャンツ」となるところが弾き終わった快感として一気にくる。

最初の一楽章はまったくとした雰囲気がある。その後にある元気が良いところもまた飽きさせない。川の流れるように清らかで快い。そこが魅力だ。

ホルンのメロディーと共に嵐のようになるところは、力強くすさまじい。しかし、途中で感動してしまいう程に心をそとつかむヴァイオリンのメロディーは思わず泣きそうになる。これも好きだ。

二楽章はひっそりとしている。チェロのメロディーが小さくも細やかに音を紡いでいる。途中のホルンは、やわらかくも優しい所が自分の中では良い。

中盤のフルートは子守り歌より優しい。そして次に包みこむような音色が響き渡る。それは自然界より優しく、青き宇宙のように広く、宝石のように美しくそして優雅だ。もはや好きというレベルではない。

しかし、最初が嫌いだった。曲の長さとい難しさとい何一つ好きではなかった。(合奏するまでは)しかし合奏をして、驚いた。一人で演奏している時とは違いずっと素晴らしく泣けた。

感動した曲は何度でも聞ける。なぜならその曲の全楽章を頭にインプットしておけば、どんなに悲しいことがあっても苦しいことがあっても、はたまたおさえきれない程の強いストレスがたまっていても、その曲を思い出せば、乗り越えることができた。解消できると信じているからだ。

このように「ブラームス交響曲第二番」はブラームスからの歴史に満ちた手紙であり、私の人生の中で一番を誇る曲なのだ。

曲名 交響曲第二番
作曲 ヨハネス・ブラームス